

広島、長崎の原爆被爆者における放射線被曝^{ばく}と肝臓、胆道、膵臓^{すい}がんのリスク: 1958-2009 年

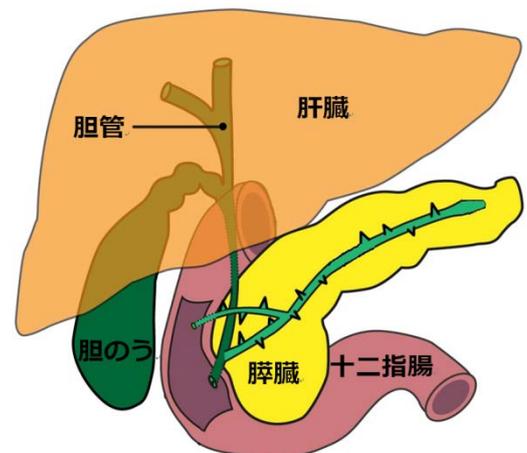
これまでの放影研の寿命調査*では、原爆放射線への被ばくによって肝臓がんを発症するリスク（危険性）が上昇することが分かっていました。調査期間を延長した今回の調査では、1958年から2009年の期間における最新の肝臓、胆道、膵臓がんの放射線リスクを報告しました。解析では、肝臓がんのリスクを上昇させることが知られており、放射線のリスク推定に影響を及ぼす可能性のある飲酒と喫煙も考慮しました。

調査の対象となった方は、追跡調査開始時までにかんにかかったことがなく、原爆からの被ばく線量が分かっている105,444名で、対象症例は、肝臓（肝内胆管を含む）、胆道（胆嚢と肝外胆管）、および膵臓のがんです。

調査期間中に2,016例の肝臓がんを確認し、肝臓がんのリスクは原爆の被ばく線量に比例して上昇していました。被爆時年齢別に見ると、被爆時に0-9歳、10-19歳、20-29歳であった方で放射線被ばくによる肝臓がんのリスクが増加していましたが、30歳以上であった方では増加していませんでした。喫煙と飲酒は、それぞれ肝臓がんのリスクを上昇させていましたが、放射線のリスク推定には影響を及ぼしていませんでした。胆道がんは694例確認しましたが、これまでの寿命調査の結果と同じく、放射線被ばくと胆道がんのリスクとの関係は見られませんでした。膵臓がんは723例確認し、女性において放射線被ばくによる膵臓がんのリスクが上昇する可能性が示されました。男性にはこの傾向は見られませんでした。

* 寿命調査

原爆放射線が死因やがん発生に与える長期的影響の調査を主な目的としています。1950年の国勢調査の際に、原爆当時に広島・長崎にいたことが確認された人の中から選ばれた約94,000人の被爆者と、約27,000人の原爆当時に市内にいなかった人から成る約12万人の対象者を追跡調査しています。



本資料は、専門家でない方向けに出来るだけわかりやすく解説することを最優先しています。そのため専門的な内容は割愛しており、論文内容を完全に再現しているものではありません。より詳しい内容は出版社の論文をご覧ください。